

スピーカーアキュライザーの導入(4)
ーハイレゾファイル音源再生ー

1. 始めに

前報(3)に引き続き、スピーカーアキュライザーSPA-7の試聴を実施します。

2. スピーカーアキュライザーSPA-7の試聴計画

スピーカーアキュライザーSPA-7の設定条件は、前報(2)に述べたとおりとします。試聴するファイル音源は以下のとおりで、fidata HFAS1-S10 収納音源から USB 経由で Brooklyn DAC+への送り出しの再生とします。使用する音源は、ステレオサウンド社の 11.2MHzDSD 音源とユニバーサルミュージックの MQA 音源から選び、アナログマスターの雰囲気や再現性の再現性やハイレゾ音源のメリットを確認することとします。

11.2MHzDSD 音源

ステレオサウンド社 SSHRB-006

グスターヴ・ホルスト 組曲《惑星》

ズービン・メータ指揮 ロスアンゼルスフィルハーモニー管弦楽団

ステレオサウンド社 SSHRB-005

ヨハン・セバスティアン・バッハ 無伴奏チェロ組曲

ヤーノシュ・シュタルケル

ステレオサウンド社 SSHRB-004

ロイヤルバレエガラコンサート

チャイコフスキー他 くるみ割り人形(抜粋) 他

エルネスト・アンセルメ指揮コヴェントガーデン王立歌劇場管弦楽団

MQA 音源

Universal Music UCCG-40074(MQACD)

ドボルザーク 交響曲 8 番・9 番

ラファエル・クーベリック指揮ベルリンフィル

Universal Music UCCG-40005(MQACD)

アントン・ブルックナー 交響曲第 4 番《ロマンティック》

カール・ベーム指揮ウィーンフィル

Universal Music UCCG-40007(MQACD)

グスタフ・マーラー 交響曲第 5 番

ゲオルグ・ショルティ指揮シカゴ交響楽団

3. スピーカーアキュライザーSPA-7の試聴結果

再生に際しては、各レーベルのマスターの特性に合わせ、**Brooklyn DAC+**で適宜位相反転を選択しています。

ホルストの組曲《惑星》は、木星を聴きましたが、空間表現が広大で、定位もしっかりしており、ホルンその他の金管の響きが壮大です。ティンパニの切れ味やコントラバスの下支えも十分聴き取れて、管弦楽の面白さを訴えてくれています。

バッハの無伴奏チェロ組曲は、1番から聴いていきましたが、これまでよりチェロの音が滑らかであり、胴鳴りがよく響くようになっています。

コヴェントガーデンのロイヤルバレエガラコンサートは、くるみ割り人形の花のワルツとコッペリアの **Introduction and Mazurka** を聴いていきました。花のワルツでは、冒頭のハープがリアルに浮き出て、木管が次々と受け継ぎ、それを弦が紡いでいくという、バレエ音楽らしい華やかさが味わえます。なお、オリジナルのマスターテープから **DSD** への忠実なリマスターということで、ところどころテープの傷みも感じられます。コッペリアの方はテープの傷みもないようで、フレッシュな空間表現と弦、木管、金管それぞれの質感もよく出ており、バレエの楽しさを盛り上げるような音楽です。

ドボルザークの交響曲 8 番・9 番は、8 番を聴いていきましたが、緻密で中欧の牧歌的な雰囲気がある演奏で展開されます。

ブルックナーの交響曲第 4 番《ロマンティック》、1 楽章と 2 楽章を聴いていきましたが、ウィーンフィルらしい弦のなめらかさと総奏の盛り上がり、この曲の魅力を引き出しています。この演奏は、アナログ盤もありますので、聴き比べてみました。アナログ盤も SPA-7 の導入で、一層音が緻密になり、まるでダイナミックレンジも拡大したように感じます。アナログ盤とくらべると、MQA の方は、滑らかさでは若干劣るものの、かなり差を詰めた印象です。

マーラーの交響曲第 5 番は、1 楽章を聴いていきましたが、金管の煌びやかさ、低弦の刻み、弦の滑らかさなどが目立ち、通常の CD にはないレンジの拡大が感じられます。

4. まとめ

11.2MHzDSD 音源は、アナログマスターからの直接のリマスターということで、空間表現の確かさと楽器の質感が、ハイレゾというフォーマットを借りて、これまで以上に的確に表現できるようになっています。MQA 音源は、アナログマスターからデジタルリマスターを経由して MQA のフォーマットにアレンジされていますが、通常の CD にはないレンジ感がでています。いずれもこれまでにない、フォ

一マツト本来の優位性を示してくれています。

以上